

OVERWATCH 2

ポケット・キング



MIRANDA MOYER 著

ストーリー
MIRANDA MOYER

編集
CHLOE FRABONI

ストーリー監修
MADI BUCKINGHAM

クリエイティブ監修
**RAPHAEL AHAD, JEFF CHAMBERLAIN, JUSTIN GROOT,
GAVIN JURGENS-FYHRIE, AARON KELLER,
MIRANDA MOYER, DION ROGERS, ARNOLD TSANG**

プロデューサー
BRIANNE MESSINA

デザイナー
COREY PETERSCHMIDT

画
VALENTINA REMENAR

マクシミリアン オリジナル・コンセプト
ARNOLD TSANG

スペシャルサンクス
MADDY COOK

ポケット・キング



マクシミアンと司令部の間にできた溝を、いっそう深めるような通話が終わった。

先程まで話していたホログラムから解放されたマクシミアンは、暗いオフィスに一人で座っている。辺りを照らすものと言えばデータパッドだけだ。プログレスバーが画面上を進んでいるのが見える。

データ転送中 : 23%…

モンテカルロの商売仲間からは反対されていたものの、マクシミアンはタロンと手を組むことにほとんど葛藤はなかった。彼らの結んだ契約はお互いに利益のあるものだった。タロンはマクシミアンのビジネスの知識と資産、そして極秘裏に資金を動かすためのノウハウを手に入れ、マクシミアンは競合を蹴り落とす力を得た。長年、その完璧な均衡が崩れることはなかった。

しかし、契約というのはいつか条件が変わるものだ。

データ転送中 : 46%…

マクシミリアンは机から立ち上がり、カジノのフロアを見下ろす窓のほうへと歩み寄る。テーブルの客たちは、賭け金が何倍にもなって返ってくるという夢に全財産をつぎ込むことをいとわない者ばかり。

以前は彼らをあざけることができた。勝ち目のないゲームに自分の意志ですべてを賭けるなんて、と。

しかし今は、彼らの気持ちが分かる気がする。タロンはかつてマクシミリアンにとっての大本命だった。躊躇なくオール・インすることができたし——実際そうしてきた。しかしタロンとのゲームを進めるにつれ——新たなプレイヤーが席につき——オッズが変わってきたのだ。

データ転送中：71%…

マクシミリアンが不利な状況を五分五分に持ち込んだのは、これが初めてではない。最初からこの結末のために準備を重ねていたと言ってい。

ヴィットリアが金色に光るサイバネティクスの手で吸入器を口に運び、ライラック色の煙をくゆらせる。

「あの女に、私に逆らうとどうなるか教えないと」

マクシミリアンは、煙たいオフィスの窓からモンテカルロの残骸を見渡す。彼が南フランスの戦場で目覚める前までは、モンテカルロといえば富の象徴だったしかし、世界を変えたクライシスは彼の故郷もすっかり変貌させてしまった。厳しい戦争は人々の財布の紐を締めさせた。気づけば、栄華を極めたモンテカルロは跡形もなく消えていた。

だが、それはマクシミリアンにとって慣れた状況だった。マルセイユ付近の小さな会計事務所の下っ端会計士として、何年も「何も持たざる」状態で暮らしてきた。モンテカルロは不毛の地であり、オムニックならなおのこと成功の目はない。それが大多数の意見だったが、そうは思わない者もいた。この街には大きな力が眠っている。彼のクライアントたちがその証拠だ。

マクシミリアンはそんなクライアントの一人に視線を向ける。ヴィットリア・カプリはデザイナー・サイバネティクス産業で莫大な財を成した人物だ。イタリアで起業した彼女は巨万の富を築き、世界中の注目を集めることとなった。この世界の常で、彼女は目をつけたものをすぐに手に入れたがる。そんな彼女が今狙いをつけ

モンテカルロは不毛の地であり、
オムニックならなおのこと成功の目はない。
それが大多数の意見だったが、
そうは思わない者もいた。
この街には大きな力が眠っている。

ているのが、このモンテカルロだった。

「あの婆さんにはうんざりしちゃうわ。私に命令できるとでも思ってるのかしら」

「婆さん」というのはリリー・フォン・アルクスを指す。不動産業界の巨頭で、モンテカルロの覇権を巡る争いを繰り返している実業家の一人だ。偶然にも、マクシミリアンはリリーのファイナンシャル・アドバイザーも務めていた。

ヴィットリアはマクシミリアンに向かって指を鳴らす。

「提案書を作りなさい」

ヴィットリアを形容するのに「気難しい」という言葉ではぬるすぎる。それでも、マクシミリアンは彼女に対して忠誠心のようなものを持っていた。というのも、彼女はこの街で最初のクライアントだったのだ。そのコネクションのお陰で、彼は今もこの街にいる。そんな彼女の指示に懸念を覚え、他の手を勧めることにした。

「ミス・カプリ、僭越ながら申し上げますが、考え直したほうがよろしいかと」

マクシミリアンは躊躇し、言葉を選ぶために少し黙った。

「率直に申し上げまして、ライバルの力を弱めるための工作は費用がかさみます。相手だけでなくあなたにとっても」

ヴィットリアの黒い瞳がマクシミリアンを見据え、視線ががち合った。その夜初めてのことだった。彼女は金色の人差し指を彼に突きつける。

「よく聞きなさい。あなたはこのゲームのプレイヤーですらない、なんの力もない存在。当然、物事の価値を決める資格なんかない——それは私の仕事よ」

鋭くまくし立てて、片眉を吊り上げている。

「分かった？」

マクシミリアンは首を傾げる。

「もちろんです、ミス・カブリ」

彼の心に残ったのは、ヴィットリアの残酷な言葉ではなく愚かさだった。したたかに敵を出し抜こうとするわけでもなく、意味のない虚栄心に溺れている。そういう人間は彼女ではなかった。

ランス・ヴァイランコート、リリー・フォン・アルクス、サルヴァトーレ・パリス。ヴィットリアと同じ考え方をするクライアントは多い。ある雑誌は彼らを“ラ・コトリー”（徒党）と表現した（もっとも、今は廃刊に追い込まれたが）。

マクシミリアンに言わせれば、これ以上びったりな通り名はない。彼らは内輪もめを繰り返す友人グループのようなものだ。大局が見えていない、いや、見ようともしていない。

確かにヴィットリアの言っていたとおり、彼はこのゲームのプレイヤーではないのかもしれない。だとすれば彼らのルールに従う必要もないわけだ。

マクシミリアンはヴィットリアの望みどおりの復讐を組み立てはじめた。実際の所、大した手間はかからない。モンテカルロ中で引く手あまたのファイナンシャル・アドバイザーであるマクシミリアンは、街の大物たちの資産が本来お互いに繋がっていることを熟知していたからだ。その所有権と債務が複雑に絡み合った関係性を読み解けるのは彼だけだった。ヴィットリアの資産をリリーのそれに対する武器に変えるのは簡単なことだ。

ほとぼりが冷めた頃に、すべての利益がマクシミリアンの元に転がり込んでくるようにするのは、さらに簡単だった。

一時間も経たないうちに、マクシミリアンはヴィットリアのために提案書を書き上げた。彼女の前にホロドキュメントを差し出す。

「これでいかがでしょうか」

ヴィットリアは礼もなくドキュメントをスワイプしはじめる。印がついた箇所まで読み進め、それがリリーを軽視する内容だと確認すると、そこで読むのをやめた。彼女はホロドキュメントに慣れた手付きで署名をすると、マクシミリアンに送り返した。

「もう用はないわ」

マクシミリアンは内心ほくそ笑んだ。

今自分はこのテーブルの上座に立ち、ヨーロッパで最も力を持つ者たちの視線を一身に浴びている。オムニックに主導権を握られ、彼らは心底屈辱を感じていることだろう。しかし、屈辱にはいずれ慣れるものだ。

「皆さま。お集まりいただき、ありがとうございます」

マクシミリアンは長い会議用テーブルの上座に立ち、客人たちに背を向けて巨大な窓から外を見ている。彼の所有するカジノを中心に、絢爛豪華な街並みが現れていた。新たに修復されたベル・エポック建築の内側には、大富豪たちが湯水のように金を使う遊興施設が収まっている。

マクシミリアンのカジノにある役員室には、モンテカルロを統べる六人の重鎮が集っていた。全員を集めるのは至難の業だったし、今もテーブルを囲んでお互いに緊張した表情で睨み合っている。マクシミリアンには彼らの考えがよく分かっていた。彼らは絶えず計略をめぐらせ、悪だくみをし、お互いを操作しようと目論んでいる。彼らの下で働いたマクシミリアンは、それを間近で見てきた。

じきに席を立つ者が現れるだろう。とはいえ、そう長くはかからないはずだ。

マクシミリアンはさっそく話しはじめる。

「皆さまとはもう長い付き合いになりますね。大変ありがたいことです。ファイナンシャル・アドバイザーとして皆さまにお仕えするかたわら、私はこの街が廃墟から楽園へと返り咲くのを見てきました。モンテカルロはかつての栄光に追いつき——今や追い抜いたのです」

「何が言いたいのかしら、マクシミリアン」

口を挟んだのはリリーだ。

「思い出に浸っている時間なんてなくてよ」

武器商人のランス・ヴァイランコートが椅子にもたれかかる。

「おい、こっちは仕事があるんだが」

マクシミリアンは落ち着いた口調を保つ。

「果たして、そうでしょうか」

彼は振り返って人間たちのほうを向いた。昔から、マクシミリアンは人間の表情が好きだった。一言も発することなく、これほどの情報量を伝達できるとは。客人たちの顔から読み取れる情報は、怒り、混乱……しかし、コレット・カシェットの顔は違った。コレットは大物たちの中では最年少で、三十歳にもなっていないが、重役の中でも鋭い洞察力の持ち主だった。

彼女は、目を細めてマクシミリアンを見つめる。

「一体何をしたの？」

この瞬間はマクシミリアンにとって最高の思い出になった。今自分はこのテーブルの上座に立ち、ヨーロッパで最も力を持つ者たちの視線を一身に浴びている。オムニックに主導権を握られ、彼らは心底屈辱を感じていることだろう。しかし、屈辱にはいずれ慣れるものだ。

「皆さま一人ひとりと仕事ができたことは、大変光栄でした。私のような者を雇うのは大変なご負担だったでしょうに、皆さまは私に最高の敬意を払ってくださった——まるで人間のように」

雇い主たちの顔に浮かんでいるのは、まさか罪悪感か？何か思い出して、口を挟むのを躊躇しているかのようじゃないか。

「最も感銘を受けたのは、皆さまの寛大さです。卑しいオムニックごときに、資産とその運用をすべて任せるほどお優しい方は他にいません」

彼らはまだ気づいていなかったが、マクシミリアンの語る言葉は真実だった。長年それぞれの帝国の運営を任されていたマクシミリアンは、複雑に入り組んだ有事契約と注意深く書かれた取り決めがすべて彼自身の利益となる仕組みを作り上げていた。マクシミリアンの偉業を支えたのは、彼に全く敬意を持っていない大富豪たちだったのだ。

ヨーロッパで最大規模を誇る巨大マスコミ複合企業の所有者——いや、“元”所有者であるフェリシテ・パードはフンと鼻を鳴らしたが、マクシミリアンは彼女の唇が微かに震えているのを見過ごさなかった。

「馬鹿げているわ。あなたのゲームに付き合う気はない。

うちの顧問弁護士からの連絡を待ちなさい」

彼女は吐き捨てるように言うと椅子を立った。

「無駄ですよ」

マクシミリアンが冷静に返すと、フラシ天のコートをまとった彼女は肩越しに彼

を睨みつけた。マクシミリアンは首を傾げる。

「御社の資産を手放したのはあなた自身ではないですか」

フェリシテは鼻腔を広げ、大きく見開いた目で必死にマクシミリアンの金属でできた顔面を探っている。

「ハッターだわ。ハッターに決まってる！」

マクシミリアンはテーブルの他の面々に向き直った。

「皆さまには選択肢がふたつあります。ひとつは私の下で働き、この街を繁栄させ、全員で利益を得ること。もうひとつはご自身を欺き——私の“ハッター”をコールして、素寒貧でこの役員室を出ること、です」

日頃からしかめっ面を浮かべているヴィットリアの表情が、見たこともないほど陰しくなった。

「クソ野郎……この屑め。あんたなんか、ただのオムニックよ」

「ええ。電話一本でこの部屋にいる全員を破産させられる、ただのオムニックでございます。ドミノはすべて私のほうで並べておきました。倒れるかどうかは皆さま次第です」

室内は混沌に陥った。最新ファッションの仕掛け人であるサルヴァトーレ・パリシはホロスクリーンを開き、この会計年度の契約をすべて見直している。

「アクソム売却も……ロンドンの取引も……全部裏切りだった」

そう呟き、ホロスクリーンを読み進める彼の額はみるみる汗ばんでいく。

「到底承服できん。こんな行為が許されるとでも思っているのか！」

「もう遅くてよ」

リリーがマクシミリアンの代わりに返答した。彼女もまた、締結してきた契約を見直しており、自らの破滅を招いた細則に初めて目を通していた。そして鋭い溜息とともに、かぶりを振る。

「よくもやったわね……」

ランスとヴィットリアは競争するかのように口汚くマクシミリアンを罵っている。彼らの怒声のせいでフェリシテは電話口の弁護士たちの声が聞こえづらいようだったが——表情から判断する限り、返答は思わしくないようだった。

そんな中、コレットだけは沈黙を保っていた。マクシミリアンは興味深く彼女を観察する。重役たちが面食らって大声でまくし立てる中、彼女は眉間に皺を寄せ現状を整理しようとしている。貧乏ゆすりをしながら、テーブルを睨みつけている。

コレットがゆっくりと立ち上がる。彼女がマクシミリアンに手を伸ばすのを見た他の面々は言葉を失った。

「今後もよろしく頼むわ、マクシミリアン」

彼と握手を交わすと、コレットは再び座った。

長い沈黙が続いた。啞然とこちらを見ている人間たちの顔をマクシミリアンは大いに楽しんだ。コレットは抵抗しようとも交渉しようともしなかった。彼女は提示された条件を飲んだだけで。握手ひとつで彼女の人生は変わったし、他の面々も自分たちが同じ命運をたどるしかないことに気づいているのは明白だった。

一人ずつ、席を立てマクシミリアンと握手を交わす。中には自分を納得させるのに時間がかかる者もいたが、結局は叫んだり思案したり、それぞれのやり方で悲しみの段階を乗り越え……マクシミリアンの提案を受け入れた。

最後まで残ったのはヴィットリアだ。彼女は最初こそ叫び声を上げていたが、今や虚空を睨みつけることしかできなくなっていた。震える金の拳で、テーブルをコツコツと叩いている。

マクシミリアンは彼女に向かって腕を広げた。

「ご協力いただけますね？ミス・カプリ」

それは質問ではなかった。たとえマクシミリアンによって資産を押さえられていなかったとしても、この状況で断ればヴィットリアは多勢に無勢だ。他の富豪たちによって数日のうちに街から追い出されるだろう。

もちろんマクシミリアンは彼女が同意するしかないことは分かっている。単純に、彼女が負けを認めるのを見たいだけだ。

ヴィットリアは震える手で吸入器を口元に運ぶ。決してマクシミリアンと目を合わせようとしなない。

その唇に、歪んだ笑みが浮かぶ。

「勝ったと思ってるの？まったく……これだから初心者には困るわ」

彼女はマクシミリアンに向かって囁く。

「負けたときはどうなるか、知らないほうがいい」

マクシミリアンは面白がるように首を傾げ、目を閉じた。彼女にはこれ以上期待しても無駄だろう。

「私は生き残ります」

マクシミリアンが指をパチンと鳴らすと、給仕が部屋に入ってくる。彼らはテーブルを囲み、全員にシャンパンを注ぐ——マクシミリアンの分もだ。彼はそれを飲むことこそできないが、仕草を真似るだけでも大きな影響力を持つ。

彼はグラスを掲げた。

「では、乾杯しましょう。モンテカルロの未来に」

「勝ったと思ってるの？ まったく……
これだから初心者は困るわ」
彼女はマクシミリアンに向かって囁く。
「負けたときはどうなるか、
知らないほうがいい」

熱意の度合いはそれぞれだったが、全員順番にグラスを持ち上げる。

「モンテカルロの未来に」

初めて暗殺者を送り込まれたら心配するべきだが、二人目は……賛辞と捉えるべきだ。

マクシミリアンは自分のオフィスを誇りに思っていた。オフィスを擁するカジノはモザイクタイルのように組み合わされた資産の最初の一枚に過ぎなかったが、オフィスは彼の努力の象徴だった。他のどんな人間もオムニックも、マクシミリアンが勝ち取った成功を奪えない。彼一人が享受できるものだった。

そんな彼の宝物であるオフィスが、すっかり瓦礫の山となってしまった。壊れていないものは何もない。大枚をはたいて揃えた美術品もすべて粉々になっている。護衛部隊は瓦礫に埋もれて倒れ、穴の開いたボディから火花を散らしている。

マクシミリアンは机の残骸の前に立ち、眼前の大男を見上げる。彼もまた、じつとマクシミリアンを見つめた。二人は、混沌の後の静けさをじっくりと味わいながら相手の出方を伺っている。最初にフォールドしたのは、駆け引き上手のマクシミリアンだった。

「困りましたね」

マクシミリアンは両手を挙げる。どこか余裕のある降参だ。彼は酒をしまっていたキャビネットの残骸のほうへ向かうと、ひとつの蝶番でかろうじてくっついている戸を開いた。

「前回の暗殺者よりずいぶん優秀ですね。他ならぬドゥームフィストご本人なら

当然ですが。何かお飲みになりますか？」

ドゥームフィストと呼ばれた男は、愛想よく振る舞うマクシミリアンにはなびかなかつた。黙ったままの彼にマクシミリアンはスコッチを注いだロックグラスを渡した。男は巨大なガントレットを動かし、人差し指と親指で小さなグラスを摘んで、重い口を開く。

「私は暗殺者ではない。送り込む側だ」

彼は顔をこちらに向けもしないまま、摘んでいたグラスを砕いた。

マクシミリアンは飛んできたガラス片をスーツからはたく。

「なるほど。では今月いらした方はあなたの差し金ということでしょうか？」

ドゥームフィストはマクシミリアンの質問に答える。

「私の暗殺者が失敗することはなかったし、ターゲットの提案した取引を持ち帰ってくることもなかった。今まではな」

どうやら嘘は言っていないようだ。アカンデ・オグンディムは、マックスの認識が正しければ“三人目”のドゥームフィストで——数が多くて覚えるのが大変だ——とにかく、権力を行使する術を熟知している男だ。タロンが内部事情を公にすることはほとんどなかったが、組織内では誰もドゥームフィストの絶対的権威に楯突く者はいないという噂は漏れ聞こえていた。

異議を唱えれば、苦しみながら死ぬことになる。

マクシミリアンは前回の暗殺者がどうなったか気にしないほうがいいと判断し、片方の手のひらを開く。「アカンデ、あなたはご多忙のようだ——ああ、アカンデとお呼びしても？」

答えは返ってこなかったが、マクシミリアンは続ける。

「わざわざこのような平凡な街までお越しいただいたのですから、私の提案に興味を持っていただけたということでしょう」

失敗すればどうなるかは明らかだ。マクシミリアンは慎重に言葉を選んだ。交渉する際には必要な情報だけ明かす。世界経済というテーブルについているギャンブラーなら、誰もが知っていることだ。その一方で、あなたも完全に透明性のある説明をしているかのように振る舞うのがエチケットであり——礼儀とされていた。ところがアカンデはセメントブロックほどの透明性も見せていない。自分の印象を和らげるような気配りも皆無だ。気の弱い人物なら、彼を前にして威圧されてしまっていたらろう。

「話してみろ」

「あなたは私を街から排除したいと考えているようですね。思い上がった発言か

もしれませんが……私は、自分がこの場に留まったほうが、お互いにとってプラスになると考えています」

危険を承知で、マクシミリアンはアカンデに背を向けた。壊れた机を跨いで、オフィスの窓からすっかり無人になったカジノのフロアを見下ろす。

「あなたは私の資産——資金や持ち株も……すべて把握していることでしょう。アカンデ、あなたの能力に疑う余地などありません。しかし、あなたの組織にはこれだけの資産を管理し——成長させることができるような人材はいるでしょうか？」

アカンデに向き直ってみると、先程のストイックな表情が変わっていた。片方の眉を吊り上げているのではないか。

「この街は苦勞して勝ち取ったものです。何年もかけて、最大限私の利益にかなう街を作り上げてきたのです」

マクシミリアンは両手のひらを開く。

「私を殺し——王座から引きずり下ろして、後釜を据えることもできるでしょう。でもそれは金と人員と時間の無駄です。そこまでやっても、“今の”モンテカルロが手に入るだけですから」

彼は身を乗り出しながら、片手で拳を作る。

「ですが……私たちが手を組めば、モンテカルロの“未来”を手に入れることができる。いえ、世界の“未来”かもしれない」

マクシミリアンは両手を合わせる。

「もちろん、決断はあなたに委ねます」

アカンデは口を開ざしたままだが、マクシミリアンは催促する気などなかった。問題が問題だけに、判断に時間がかかるのも無理はない。ましてやアカンデのような男にとって「ターゲットを見逃す」という選択はエゴとの戦いを強いられる。しばらく待っていると、アカンデが頷き、かつての獲物から視線を外して沈思する。

「マクシミリアン。貴様の存在は昔から知っていた。世界的な危機の最中に生まれ、十年も経たないうちにただの会計士から企業帝国の主へと登り詰めた……弱き者には成し遂げられないような偉業だ」

アカンデはガントレットを上げ、指を伸ばす。金色に輝くそれはマクシミリアンの目を奪った。

「貴様はこの取引で何を得る？」

マクシミリアンはアカンデの問いに即答できない自分に驚いた。

表面上は分の悪い賭けだ——アカンデもそのことは理解しているだろう。“ラ・

コトリー”がマクシミリアンの支配を憎んだ理由はひとつだ。このゲームにおいて、支配は勝利を意味する。「勝つのはいつも店側」それがカジノの掟だ。タロンに店を譲ったマクシミリアンの立場はどうなるだろう？

「まず、私は力を得ます。あらゆるビジネスを扱っておりますので……対立的な交渉をする場面もあります。あなたの軍がバックにいることは有利に働くでしょう」

もう一度アカンデのガントレットを見やって、マクシミリアンは首を傾ける。

「生きてこの部屋を出られるという利点もあります」

アカンデは深く息を吸う。分厚い胸をさらに膨らませ、彼は凶悪な笑顔で唇を歪めた。

低く笑いながら、首を横に振っている。

「貴様はしぶとく生き残る奴だと聞いていたが、違うな。貴様は生き残るだけでなく……成功をつかみ取る」

巨大なガントレットを突き出され、マクシミリアンは彼と出会って初めて身を固くする。アカンデは黄金の手のひらを開いた。

「今後もよろしく頼むぞ、マクシミリアン」

少しの間を置いて、ニヤリと笑う。

「……マクシミリアンと呼んでも？」

マクシミリアンはアカンデが示した“親密さ”に興味と安堵感を覚えながら首を傾げた。彼はアカンデのガントレットを取る。そして、巨大な金属の手が自分の手を包み込むのを注意深く見守ってから、腕を上下させた。

長年、その完璧な均衡が崩れることはなかった。

データ転送中 : 86%…

とはいえ、アカンデは自己満足の正反対に位置する存在であることは確かだ。

取引を交わした瞬間から、マクシミリアンの金庫はタロンに開かれた。かつては、マクシミリアンがタロンの進むべき方向に口を出すこともできた。時の流れとともに新たな不確定要素が現れ、タロンの幹部陣は徐々に増えていった。その過程でアカンデとの取引はマクシミリアンにとって不利なものに変わっていた。彼はもはや、アカンデとの計画立案に加わる数少ない存在ではなくなっている。にも関わらず、金はすべて彼の金庫から払われていた。

データ転送中 : 92%…

昔から、アカンデが企てる計画は常軌を逸していた。しかし、昔と違うのはマクシミリアンが彼を信頼できなくなっているという点だ。延々と送られてくる“最新の計画”という名の資金の要求から少しずつ情報を収集しているうちに、ある結論に達した。このまま続ければ、タロンだけでなくモンテカルロも終焉を迎えるだろう。マクシミリアン自身もだ。

タロンと組む利点は安定と安全、そして支配力だった。それなのに、アカンデ自身が自分たちの運命を賭けたギャンブルを始めたのだ。

握手ひとつでマクシミリアンの人生は様変わりした。かつてのタロンは彼の望むすべてを与えてくれた。しかし、今となっては黄金の枷にすぎない。

データ転送中：完了

マクシミリアンは椅子にもたれ掛かり、頭上の真っ暗な円天井を見つめていた。右手の指先で、ポーカーのチップを一枚もてあそんでいる。

そう、マクシミリアンが不利な状況を五分五分に持ち込んだのはこれが初めてではない。そして最後にもならないだろう。